

パノラマX線写真による 骨粗鬆症スクリーニング

歯科部会では、11月13日に「パノラマX線写真による骨粗鬆症スクリーニング-医科歯科連携へ向けて」と題した講演会を開催しました。講師は、松本歯科大学の田口明先生です。

骨粗鬆症患者は、2015年時点では約1,600万人で、近年も増加しており骨折患者数も増加しています。歯科と骨粗鬆症の関係として、女性の閉経後骨粗鬆症は歯の喪失リスク因子であるといわれています。また、骨粗鬆症患者では約2倍、慢性歯周炎に罹患しやすく、約3.4倍、根尖性歯周炎のリスクをもつといわれています。つまり、骨粗鬆症は歯周病の増悪因子であるといえるということです。逆に、歯周病は骨粗鬆症の増悪因子であるかどうかに対する疫学研究も行われました。海外での疫学調査により、骨粗鬆症発生リスクは慢性歯周炎の重症度と相関がみられ、日本骨粗鬆症学会の研究では、歯周病は骨粗鬆症治療薬の作用を阻害するという結果でした。口腔衛生管理で骨折リスクの低下を期待できる疫学研究もあり、歯科定期受診とブラッシング回数が骨粗鬆症発生リスクを低下させる可能性が示唆されました。

一方、骨粗鬆症検診率は、近年5%前後で推移しており、約30%の患者しか治療を受けておらず、検診率をいかに上げるかが課題となっているようです。早期発見により食生活改善や運動、軽度の薬物治療のみで骨折や死亡のリスクを低下させるといわれています。そのためには新しいスクリーニングpathwayとして、



講師の田口明先生

医科への早期の紹介が必要であるとのことです。スクリーニング手法として、多くの歯科医院で可能な方法で簡便である必要があり、パノラマX線写真を利用することが提言されました。具体的には、オトガイ孔下方の下顎骨皮質骨の変化(厚みと形態)を読影により、正常、中等度、重症に分類して医科へ紹介します。その根拠となる全身骨密度、骨代謝マーカー、骨折リスクと皮質骨指標で相関を認めるという研究結果も提示されました。

現在、スクリーニングのトレーニングを一部の歯科医師会、大学にて実施しているとのことです。このスクリーニング手法が普及すれば、パノラマX線写真により骨粗鬆症が疑われる患者を早期に医科へ紹介し、同時に歯科医院で歯周病増悪予防、口腔衛生管理、MRONJ予防を行うことが可能になります。この連携により、顎骨壊死予防のみならず、骨粗鬆症患者における歯周病の増悪と歯の喪失リスクを低下させることが期待できるとのことでした。